

## 江馬修『山の民』研究序説〔十二〕

——改稿過程の検討（十二）・冬芽書房版から理論社版へ（後の下）——

柴 口 順 一

（帯広畜産大学人間科学研究部門）

二〇一五年四月二十八日受付

二〇一五年七月二十八日受理

An introductory study on Shu Ema "Yama no Tami" [12] :

A research on the process of rewriting (12)・From Toga Shobo version to Riron Sha version (C-y)

Junichi SHIBAGUCHI

### はじめに

前稿に引き続き、本稿では江馬修『山の民』の冬芽書房版から理論社版への改稿における、単位内の変更を検討する。改めて確認するまでもないが、各本文中の章分けに加えて、各章中に行なわれる一行あけによる区分を併用して分けたものが各单位である。前稿では第三部を検討した。本稿では第四部を検討する。ただし、第四部とは理論社版におけるもので、冬芽書房版では第三部の後半にあたることは前稿で述べた。

#### 一

前稿と同様、以前に作製した各单位の内容をごく簡単に要約した一覧に、単位

内の変更を書き加えることで、まずはおおよそその変更を整理することからはじめる。変更は、構成の変更、新たに加えられた部分、省かれた部分の三つに分け、それぞれ△、⊕、□の記号を付し、⊕と□の部分についてはその内容の簡単な要約を付す。構成の変更についてはそれを簡単に記すことは困難なため、△のみを記すにとどめざるを得ない。それについてはのちに検討する際に説明する。追加部分及び省略部分にはページ並びに行数を記す。当然ながら、追加部分のページは理論社版の、省略部分のページは冬芽書房版のそれである。⊕、□、及び△にはそれぞれ番号を付しておく。ただし、□の部分は冬芽書房版第三部にあたるので、前稿で付したものの続き番号で記す。ページ並びに行数は「／」をはさんでその順に記す

第四部 蜂起

一

【1】（二月八日）川上屋善右衛門、嘆願のため京都へ向かう。

⊕ 1 郷倉建立掛りを命じられ暗澹となる組頭たち。（3下／5）

【2】善右衛門、脇田頼三に会い、相談の上願書を提出。

⊕ 2 善右衛門、赤田屋瑛次郎を同道させなかったことを悔む。（7上／5）

△ 1

二

【3】善右衛門、留守中の宿に梅村の追手が来たことを知り、役所に保護を求め。

【4】善右衛門、刑法官の取り調べを受け、願書を提出。

⊕ 3 善右衛門の言葉（の一部）。（19下／9）

【5】善右衛門、再び追手につかまりそうになる。

△ 2

三

【6】善右衛門、刑法官に再度願書を提出。

⊕ 4 善右衛門の自問。（24上／7）

⊕ 5 要領を得た瑛次郎の文章。（25上／6）

四

【7】関所廃止の行政官布告にとまどう役所。

【8】苗字帯刀許可の変更により、いっそう強まる梅村への反発。

【9】商法局の主要産業独占に高まる不満。

△ 3

□ 34 商法局に対する人々の不満。（248／6）

【10】探索方、高山に乗り込み、一方赤田屋瑛二郎ら謹慎処分に。

【11】刑法官監察司、高山を訪れ調査。

【12】高山町内にあらわれた落書。

五

【13】各所でのぼや騒ぎ。

⊕ 6 半鐘の音に外へ飛び出す人々。（38上／5）

⊕ 7 火方と兵士の会話。（38下／39上／11）

【14】火方と訓練隊の反目。

⊕ 8 火方装束以外の人々。（40上／13）

⊕ 9 兵士に対する火方らの不満。（40上／下／18）

△ 4

⊕ 10 兼業禁止に対する人々の不満。（40下／41上／41）

⊕ 11 人々の会話。（41下／42下／41）

【15】火方ら、寄り合いを持ち団結を深める。

⊕ 12 上野の森と火方らの様子。（42下／43上／16）

⊕ 13 廻状を読み奮起する人々。（44上／下／18）

【16】自衛のため見張りに立つ百姓たち。

【17】松本村藤兵衛、古川町の消防組のたいまつを狐火と見まちがう。

六

【18】旧地役人、つのる不満から口上書を提出。

⊕ 14 吉田文助と富田稲太の会話（の一部）。（55上／9）

【19】旧地役人の再度の要求に危機をおぼえ、吉田文助京都へ行くことを決意。

⊕ 15 年貢軽減の要求は百姓たちにとっては当然であったこと。

【20】吉田文助、京都の梅村のもとへ向かう。

□ 35 吉田の立場について。（56上／5）

⊕ 16 富田には知らせず陣屋を抜け出す吉田。（57下／58上／8）

【21】真夜中、半鐘がけたたましく鳴り火事騒ぎ。

□ 36 駕籠のなかの吉田。（272／273／4）

七

【21】真夜中、半鐘がけたたましく鳴り火事騒ぎ。

⊕ 17 地役人、役所へ談判。（59下／11）

- 【22】 江馬弥平の家の作小屋、火事にあう。  
 ㊦ 38 増蔵について。 (276 / 4)  
 ㊦ 19 喊声をあげ駆け出す人々。 (63 上 / 6)
- 【23】 江馬の家をはじめ多くの家が打ちこわしにあう。  
 ㊦ 20 まわりの山々にこだまする鐘の音。 (66 上 / 7)  
 ㊦ 21 軒先の提灯をひっこめる家々。 (66 下 / 6)
- 【24】 人々の不安のなか、打ちこわしは続く。  
 ㊦ 22 不安な一夜を過ごす人々。 (67 上 / 下 / 13)
- 八
- 【25】 打ちこわしはさらに拡大し、牢屋や学校までが襲われる。  
 ㊦ 23 寺々の鐘が鳴り、打ちこわしの知らせが届く。 (69 下 / 6)
- 【26】 門番の辰造、引きまわしの果てに殺害される。  
 ㊦ 24 門番の辰造、清吉に声をかけられ逃げ出す。 (72 上 / 下 / 16)  
 ㊦ 25 清吉が切りつけられ大騒ぎとなる。 (72 下 / 9)  
 ㊦ 26 役所の内庭におりるも隠れ場所のない辰造。 (73 上 / 下 / 7)  
 ㊦ 27 役所の門前に居並ぶ役人たち。 (73 下 / 6)  
 ㊦ 28 役所内に入り込む火方たち。 (74 上 / 7)  
 ㊦ 29 辰造を様々になぶる人々。 (74 下 / 7)
- 【27】 鳥羽良映がつかまるが、僧侶のため入牢はまぬがれる。  
 【28】 おつるを逃がそうとした吉田忠太郎がつかまり牢屋へ。  
 ㊦ 30 吉田、おつるを伴ない逃走。 (76 下 / 78 上 / 52)  
 ㊦ 31 吉田、縄をかけられ物置小屋につながる。 (78 上 / 4)
- 【29】 忠太郎とはぐれたおつるは逃げ、自殺を試みるが失敗。  
 【30】 暴動が拡大するなか、難を逃れようとする人々。  
 ㊦ 32 それぞれの村で騒動が起こる。 (82 下 / 7)  
 ㊦ 33 意気あがる百姓たち。 (83 上 / 6)
- 九
- 【31】 暴動のさらなる拡大を危惧する旧地役人、様々な対策を講じ一時沈静化。  
 ㊦ 40 地役人たちの不安。 (293 / 5)  
 ㊦ 35 地役人たちの思惑。 (87 上 / 下 / 15)  
 ㊦ 36 いくらか平穩になった高山。 (89 下 / 10)  
 ㊦ 37 偶然をよそおい吉住礼助があらわれる。 (90 上 / 15)  
 ㊦ 38 市次郎と増造の会話。 (90 下 / 91 上 / 16)  
 ㊦ 41 火方たちの考え。 (296 / 9)  
 ㊦ 39 火方たちの会話。 (93 上 / 6)  
 ㊦ 40 百姓と安右衛門の会話。 (94 下 / 95 上 / 8)  
 ㊦ 41 百姓たちの会話。 (95 下 / 10)
- 一〇
- 【32】 続々と京都へ向かう反梅村派。  
 【33】 禁足の梅村、役所の富田に手紙で対処を指示。  
 【34】 刑法官判事から取り調べを受けた梅村、(三月五日)禁をおかして高山へ向かう。  
 ㊦ 42 おつるの消息が気かりな梅村。 (308 / 9)  
 ㊦ 43 善右衛門らの不安。 (310 / 4)  
 ㊦ 44 ある人物の言葉。 (310 / 3)
- 【35】 途中、役所の吉住・庄村に手紙を出し対処を指示。  
 ㊦ 42 梅村、おつるの父親を呼び出し、おつるの消息を尋ねる。 (104 上 / 下 / 15)
- 一一
- 【36】 梅村入国を警戒する人々。  
 ㊦ 43 治安の実権を握っていた火方たち。 (106 下 / 5)

- ④ 火方たち、陣屋の護衛も担う。  
(107上／5)
- △ 6
- ④ 5 人々、火方たちに敬意を払う。  
(107／5)
- 【37】 富田稲太、遺書を残して切腹を企てるが命は取りとめる。  
(110上／下／13)
- ④ 46 富田に同情し、礼賛する人々。
- 【38】 梅村がやって来ると聞き動揺する人々。  
(110下／上／87)
- ④ 47 様々な対策を練る人々。
- 45 郡中会所の動き。  
(319／9)
- 一一
- 【39】 梅村入国に備え、再び決起する人々。  
(114上／15)
- ④ 48 再び起こる人々の不安。
- △ 7
- ④ 49 監察司及び伊奈県、苗木藩の動き。  
(116上／下／19)
- 46 監察司と苗木藩の対処。  
(322／4)
- 【40】 人々、代官橋を中心とする宮川べりに集結。
- 【41】 火方ら、鉄砲と弾薬を入手できず。
- 【42】 遅れてかけつけてきた百姓たち。  
一四
- 【43】 一の宮の境内にかけつけた五郎作と源兵衛の会話。  
(130下／15)
- ④ 50 続々と一ノ宮に集まる百姓たち。
- ④ 51 集まって来た百姓たちの様子。  
(131上／下／14)
- ④ 52 五郎作と源兵衛の会話。  
(132上／134下／92)
- 【44】 鉄砲・兵糧が届かぬ まま先頭部隊が進発。  
(134下／135上／40)
- ④ 53 梅村接近の知らせを聞き動揺する人々。
- 47 酒もまだ届かなかったこと。  
(136上／137上／43)
- ④ 54 人々の会話。  
(323／3)
- 48 町会所と郡中会所の策略。  
(323／325／24)
- 49 人々の会話。  
(325／326／16)
- 【45】 迎えうつ人々の様々な動き。  
(138上／下／16)
- ④ 55 戦意にもえる人々。
- △ 8
- 50 竹槍を作る人々。  
(328／4)
- ④ 56 途中でひき返す為吉。  
(139下／140上／17)
- 51 民助について。  
(329／330／4)
- ④ 57 吉住と為吉の会話。  
(140下／141下／37)
- 52 その後の民助。  
(330／4)
- 【46】 吉住礼助、暴動鎮圧を画策。  
一五
- 【47】 先頭部隊、宮峠を越えるが武器と兵糧不足に悩まされる。  
(142下／6)
- ④ 58 久々野郷の状況。  
(143上／7)
- ④ 59 にぎり飯をむさぼり食う人々。  
(143下／144上／10)
- ④ 60 竹槍を作る人々。  
(331／5)
- 53 物資に窮乏する人々。  
(144下／13)
- ④ 61 物資と応援を要求する人々。
- 【48】 梅村、火方らに襲われ、逃がれる途中肩を撃たれ負傷。  
(145上／6)
- ④ 62 梅村、呼び戻しの寛恕を願う書状を認める。  
(145下／8)
- ④ 63 梅村の判断。  
(146上／下／17)
- ④ 64 梅村と源八の会話。  
(146下／147上／9)
- ④ 65 火の手が上がる家。  
(149上／150上／49)
- 【49】 梅村ら、かろうじて逃がれ苗木藩に保護を求める。  
(150下／151上／8)
- ④ 66 房吉ら、梅村を撃ったときのことを百姓たちに語る。  
(151上／7)
- ④ 67 梅村、苗木藩に身を寄せることを思いつく。  
(151下／152上／22)
- ④ 68 梅村の悪評は他に広く及んでいたこと。
- 【50】 苗木藩に梅村引き渡しを要求するが拒絶される。  
(151下／152上／22)
- ④ 69 大方の人々はひき返す。

⑦0 厳重に固められた苗木城門。 (152下／9)

⑦1 安右衛門と男の会話。 (152下／153上／12)

⑦2 五郎作の言葉。 (153下／154上／14)

⑦3 安右衛門と老侍の会話。 (154下／15)

⑦4 源兵衛、安右衛門、五郎作、宇平の会話。 (155下／156下／38)

一五

【51】 火方らの行動が激化するなか、名張村五郎左衛門が虐殺される。

⑦5 指導的立場に立った火方。 (157上／下／13)

△9

⑦6 御役所と地役人の立場。 (158下／159上／18)

⑦7 処刑場に押し寄せる人々。 (161上／12)

⑦8 五郎左衛門と人々の会話。 (161下／162上／23)

【52】 (三月十三日) 監察司知事宮原大輔、高山に入り、(十四日) 梅村罷免される。

⑦9 宮原、鎮静にあたる。 (164上／16)

一六

【53】 宮原、一連の政策を発表。

【54】 旧地役人、辞職を申し出るが受理されず。

⑦4 宮原はまだ正式に知事に任命されていなかったこと。

(347／348／4)

【55】 郡中会所、宮原に十二ヶ条の願書を提出。

⑧0 郡中会所の状況。 (167下／10)

⑧1 願書についての評。 (169上／6)

⑧2 宮原の認識と判断。 (169下／170上／21)

⑧3 宮原の返事に対する評。 (170上／7)

⑧5 郡中会所総代ら、おとなしく引き下がる。 (352／7)

⑧4 旧地役人・郡中会所と百姓たちの対立。 (171上／172上／45)

⑧6 春になり、百姓たちが畑仕事を始める。 (359／9)

一七

【56】 川上屋善右衛門、京都での活動の後、瀧原礼造とともに帰国。

一八

【57】 宮原大輔、高山県知事に就任し、地役人たちと酒宴。

⑧5 庭の様子。 (178下／7)

⑧6 郡代時代と変わらぬ顔ぶれ。 (179上／下／12)

⑧7 宮原の言葉(の一部)。 (179下／7)

⑧8 宮原と役人たちの会話(の一部)。 (183下／184上／24)

⑧9 庄村、宮原の杯を所望する。 (185下／8)

⑨0 宮原の言葉(の一部)。 (186上／6)

⑨1 宮原と役人たちの会話。 (186下／187上／29)

⑨2 宮原と役人たちの会話(の一部)。 (370／371／20)

⑨3 宮原の言葉(の一部)。 (188上／6)

⑨4 宮原と役人たちの会話(の一部)。 (188上／下／23)

⑨5 宮原の言葉。 (372／16)

⑨6 宮原の言葉。 (373／4)

⑨7 庭の様子。 (375／4)

一九

【58】 梅村、牢で煩悶の末(明治三年十月二十六日)死ぬ。

⑨4 梅村の考え。 (191下／7)

⑨5 梅村、竹沢のことを思い出す。 (192上／193上／22)

⑨6 梅村の懊悩。 (193上／下／19)

⑨7 梅村毒殺をめぐる風説。 (194上／195上／23)

【59】 鳥羽良映のその後。

⑨8 毒殺説について。 (379／6)

⑨9 弟の牢死に憤慨する良映。 (195上／下／6)

【60】 梅村派の人々、特に江馬弥平のその後。

⑨9 柏木徳兵衛のその後。 (196下／197上／18)

④100 江馬弥平のその後。 (199上／206下／271)

二〇

【61】(六月十九日) 宮原、役人らを呼び人民沈静の心得について講話。

【62】善右衛門その他京都で活動していた人々のその後と、広瀬村五郎作の逮捕。

④101 奥田金馬太郎が帰って来る。 (213上／5)

④102 逮捕されたのは貧農ばかりだったこと。 (213下／224下／410)

④103 逮捕されたのは貧農ばかりだったこと。 (224下／225上／12)

【63】広瀬村五郎作、とうまる駕籠に乘せられ高山を去る。

④104 かつてのことを思い出し、涙を流す清兵衛。 (227下／228上／14)

前にも述べたが、この一覧には少々難点がある。これは理論社版をもとにしたものである。したがって、変更箇所はあくまでも理論社版の単位におけるものであり、冬芽書房版とは当然ずれがあることである。④の新たに加えられた部分はむろん理論社版で加えられたものであるから、すべて理論社版の単位に一致する。だが、④の省かれた部分は冬芽書房版の省かれた部分であるから、理論社版の単位とはずれている部分があるのである。△の構成の変更も理論社版の単位に合わせたものなので同様なことが起こる。そのずれは、以前に掲げた対照表を見れば明確になる。重複するので本稿で再掲することはないが、適宜冬芽書房版の単位を示すことにする。というよりは、冬芽書房版の単位をたえず併記することになるであろう。対照表を見てもわかるように、冬芽書房版の単位は先と同様な事情から、前稿で付したものの続き番号で記しており、理論社版の単位番号と一致するものはないからである。冬芽書房版の単位番号は以前と同様、へ／付けで記す。

二

これまでと同様、第四部における単位内の変更もまた極めて多い。そのなかで

も圧倒的に多いのが新たに加えられた部分であることも以前と同様である。ただ、構成の変更がこれまでよりは幾分少ないといえるであろう。以下、構成の変更、新たに加えられた部分、省かれた部分の順に見ていく。

まずは構成の変更である。△1は【2】、冬芽書房版では〈41〉の部分である。

京にのぼった川上屋善右衛門は脇田頼三に会う。梅村を失脚させるための協力を願ひ出るためである。脇田は、かつて竹沢を失脚に追い込んだ人物であった。善右衛門は、長崎留学を翌日に控えた脇田を宿にまねき宴をはる。冬芽書房版ではその部分に、脇田は長崎へ行くことをあまり面白く思っていなかったことが記されていた。若い同僚たちがそれぞれ、すでに立派な地位を与えられ東京へと出向していたからである。理論社版では、この部分は翌日の脇田出発が記されたすぐあとの部分に移されていた。前夜、酒の席で脇田がふと漏らしたことからしてである。大きながいはいはないといえるが、ただ、善右衛門は見送りのために伏見まで同道したことがすぐあとに記されていた。要するに、善右衛門は脇田に同情し伏見まで見送りに行ったという形になっているのである。二人はそこでまた二人だけの宴をもうける。冬芽書房版では脇田が思ったこととして記されており、語ったこととしては描かれていなかった。いずれがすぐれているかはともかく、変更の意図は理解できるであろう。

△2は【5】、冬芽書房版では〈46〉の部分である。脇田の助言を受け、善右衛門は刑法官に願書を提出する。もちろん、梅村の非を訴えたものである。善右衛門はやがて刑法官から呼び出され、取り調べを受ける。だが、刑法官は基本的に梅村支持の立場であった。理論社版では冒頭、そのことで善右衛門は目の前が真っ暗になったことが記されていた。梅村が正しいのであれば自分は讒訴したことになり、死罪にもなりかねないからである。冬芽書房版ではその部分はややあとの方にあつた。すぐ前の【4】の部分は、刑法官の取り調べの記述であり、その最後は涙を流す善右衛門が描かれ終わっており、理論社版の方が自然な流れになっているとはいえるであろう。

△3は【9】、冬芽書房版では〈50〉の部分である。ここは、商法局が主要産物を独占したことに對して次第に不満が高まってくるということが記されている部分で



ある。冬芽書房版では冒頭、陣屋前に建つ貧しい屋並みの家々が取りこわされたことが記されている。商法局の土蔵が手狭になったため、そこに新たな土蔵を建てるためであった。そのために、住人は強制的に立ちのかされたのであった。理論社版では最後の部分に移されていた。商法局に対する不満をより助長するといべきそのような記述をはじめに持つてきた方がよりよいともいえるが、あとに持つてきても特にまずいとはいえないであろう。

△4は【14】、冬芽書房版では〈53〉のなかば部分である。ここは、やがて反乱の中心となる火方と訓練隊の反目が描かれている部分である。商売の兼業禁止によって人々が難渋していたことが記された部分がある。理論社版ではそれがやや前の方に移されていた。そのあいだには、火方らが役所に要求した二つの事項が箇条書きで記されている部分がある。一つは、今後火事場へは決して訓練隊を立ち入らせぬこと。もう一つは、商売は万事在来どおりになし下されることである。理論社版での変更は、その第二項をあらかじめ説明しておこうとしたためであろう。もともと、冬芽書房版のようにあとに説明を加えるというのも特にまずいとはいえないであろう。

△5と△6はいずれも【36】、冬芽書房版では〈68〉の部分にある。飛驒では梅村排斥を企てる大きな騒乱が起こる。梅村はみずからそれを鎮圧するために、禁をおかして高山へ向かう。ここは、梅村の入国を警戒する人々が描かれている部分である。冒頭、騒乱は一時鎮静したかに見えたことが記される。しかし、冬芽書房版ではそれにすぐ続けて、決して鎮静したわけではなく、やや下火になったにすぎなかったことが記されている。理論社版ではそれがややあとの方に移されていた。冬芽書房版に特に不都合があるとは考えられず、その意図はよくわかっていない。以上が△5である。騒乱の中心にいた火方たちは決して武装を解かなかつたことが記されている部分がある。冬芽書房版ではそれに続けて、火方たちがいくつかの隊に分かれて町の要所要所に詰所をかまえて警備にあたっていたことが記されている。理論社版ではそれもまたややあとの方にまわされていた。これまた、冬芽書房版に特に不都合があるとは考えられず、意図は不明といわざるを得ない。以上が△6である。

△7は【39】、冬芽書房版では〈70〉の後半部分である。いよいよ梅村が入国という知らせを聞き、人々は再び決起する。合図の音が鳴り響くのを聞き、百姓たちは農作業をやめて武器を持つて家を出ていくことが記されている部分がある。理論社版ではそれがややあとの方に移されている。冬芽書房版では鐘が鳴り響く記述のすぐあとに記されている。こちらの方が自然な流れとはいえるが、理論社版が特にまずいとはいえないであろう。

△8は【45】、冬芽書房版では〈72〉の後半部分である。ここは、梅村を迎えうつ人々の様々な動きが描かれている部分である。シシツキ槍を持った百姓のなかに、途中で穂先を切り落とし、柄だけを振って後続の竹槍組にまぎれ込むものがあつたということが記された部分がある。理論社版では、それが数行あとに移されている。そのあいだには、人々は皆が皆積極的であつたわけではなく、強制されてしぶしぶ出てきたものが少なくなつたことが記されている。理論社版では、百姓たちの行動のいわば理由をはじめに持つてくる形にしようとしたのである。もちろん、冬芽書房版のようにあとに持つてきても何ら不都合はないであろう。

△9は【51】、冬芽書房版では〈76〉の部分である。梅村の肩を撃ち退散させた火方らの行動がさらに激化することが描かれている部分である。火方たちが町の旦那衆の家々をまわつて、慰労のためと称する寄付金を集めたことが記された部分がある。理論社版ではそれがやや前の方に移されている。理由はよくわからないが、大きなちがいはないというほかはない。

△10は【57】、冬芽書房版では〈85〉の部分である。ここは、宮原大輔が高山県知事に就任し、地役人たちと酒宴をはる場面である。宮原をはじめ一同が機嫌よく会話をかわし合う記述が続くのだが、やがて宮原は合羽屋のおらくのことを話題にする。宮原がおらくのその後をたずね、奥田大蔵がそれに答えるという記述の部分がある。理論社版ではおらくの話題を持ち出して間もなくその記述があるのだが、冬芽書房版ではやや会話が進んだあとに位置していた。おらくは今どうしているのかをはじめに問いただすというのもひとつのあり方といえるが、あとの方になり、ところどころという形で問うのもまたひとつのあり方というほかはない。

い。

以上が構成の変更である。これまでよりはやや少ないが、明らかに改善といえるほどのものはなかった。比較的よりよいといえるものがなかったわけではないが、全体として大きく改善されたとはいいたくないであろう。第一部のような、いわば改稿のための改稿といったほどではないにしても、第二部や第三部のような改善は認められない。

次は新たに加えられた部分である。以前と同様、新たに加えられた部分は極めて多い。これまでは、まずは大雑把に分類することからはじめていた。もとより十分な分類にはなり得ないことは承知の上、おおよそ四つに分類した。だが今回は、分類する意味はほぼないといってよいであろう。これまでは、会話の記述が極めて多く、それぞれ五割程度を占めていたが、第四部はそれも二割程度にすぎない。あたりの様子と人々の様子の記述もごくわずかであり、ことがらの説明の記述と引用の記述はゼロである。つまり、これまでと同じ分類を行なってもその数は全体の二割程度にしかないのである。もはや分類の意味をなさないのは明らかであろう。ただ、これまでと同様な形で、会話の記述だけは列挙しておくと思う。

会話の記述としては一人の発言の場合も含めておいた。一応は分けて記しておいたのでここでもそれにしたがう。まずは一人の発言である。③、⑦2、⑧7、⑨0、⑨2の五箇所である。次はそれ以外のまさに会話の記述である。⑦7、⑪1、⑪4、③8、③9、④0、④1、⑤2、⑤4、⑤7、⑥4、⑦1、⑦3、⑦4、⑦8、⑧8、⑨1、⑨3の十八箇所である。これらはむろん一部地の文を含んでいるものもあるが、すべて会話を中心とした記述である。その多くは新たな会話場面を創出したものではなく、もともとあった会話の記述をいわばふくらませる形で加えられたものであった。一人の人物の発言も同様であり、会話場面にける追加であった。すなわち、場面としては存在した人物も存在していた、ないしは当然そこに存在していたと考えられる人物による会話であった。もともとあった会話場面をより豊かにしようという意図があったと考えられるが、新たな会話場面の創出も、作品全体として会話場面を増やそうとし、より豊かにしようとい

う意図があったと考えられる。ただ、それだけではないと考えられるものもごくわずかだがあった。それについてはのちに述べる。

前稿と同様、これら以外のものを中心として特に問題となる部分をまとめて検討する。ただし、検討は省かれた部分をも一通り見たあとに合わせて行なう。新たに加えられた部分と省かれた部分とは互いに関連している場合も少なくないからである。

そこで、次に省かれた部分である。省かれた部分もまた、これまでは一応の分類を行なってきた。だが、先と同様な理由からやはり分類は行なわない。ただ、会話の記述だけはこれまでどおり列挙しておく。□39、□44、□49、□57、□58、□59の六箇所である。新たに加えられた部分としては比較的に会話の記述が多く、作品全体として会話の記述及び会話場面を増し、より豊かにしようという意図があったと述べたが、省かれた部分も比較的にいつて少ない方ではなかった。だが、その多くは差しかえというべきものであったといつてよい。すなわち、省くかわりに新たな会話の記述を加えた、あるいは新たな記述を加えたがために省いたというものである。その意味で、会話の記述をことさらに削ろうという意図は認めがたく、全体としては会話の記述を増やしより豊かにしようという意図はやはり顕著であるといつてよいであろう。

### 三

以上まとめた以外のものを中心に、特に問題となる部分を検討する。以前と同様、基本的には順を追って見ていくが、割愛する部分があることも以前と同様である。

【1】、冬芽書房版の〈40〉は、川上屋善右衛門が嘆願のため京都へ向かうことが記されている部分である。善右衛門が町会所に向向した際、数名の組頭とともに郷倉の建立掛りに任命される。①1は、建立掛りを命ぜられて暗澹となる組頭たちのことが記されていた。組頭の誰もがいかに迷惑をしていたかを補足したものである。



次は【2】、冬芽書房版では〈41〉の部分である。京にのぼった善右衛門は脇田頼三に会い、相談の上願書を提出することにした。その願書が引用という形で記されているが、そのすぐ前に④2が加えられている。善右衛門は願書の類を書いたことがなく、文章のうまい赤田屋瑛次郎を同道させなかったことを悔んだことが記されている部分である。然るべき追加といつてよいであろう。引用のすぐあとには、「恐ろしくこたえた・拙劣な文章で」あつたと記されている。これは理論社版の記述であるが、冬芽書房版にもむろん同様な記述がある。

【6】、冬芽書房版〈47〉は、善右衛門が刑法官に再度嘆願書を提出したことが記されている部分である。④4は善右衛門の自問が描かれている。人々の困窮はいつたいどうなるのか、政治の理屈さえ通れば人々の生活はどうなっても構わぬというのかといった自問である。これに前後する部分は、善右衛門が様々と思いをめぐらすことが記されており、④4はその補足といつてよいであろう。再度の願書提出のため善右衛門は再び慣れない文章に取り組みはじめたときであつた。国元の赤田屋瑛次郎から、梅村を弾劾する文章が届く。④5は、その文章が要領を得た立派なものであつたことが記されている。先の④2の記述にいわば呼応する形での追加といつてよいであろう。善右衛門はそれをもととして願書を書きあげる。その願書は理論社版では六頁、冬芽書房版では七頁にわたり長々と引用されていた。

【17】、冬芽書房版〈53〉のなかば部分は、火方と調練隊の反目が描かれている。冒頭、火方の装束について記されている。特に有力な秋葉講、神明講について記されているのだが、そのような火方装束を着ていない者たちも多く存在していた。そのことが記されたのが④8である。然るべき追加といつてよいであろう。④9は兵士に対する火方らの不満、④10は兼業禁止に対する人々の不満が記されていた。これまた、然るべき追加といふべきであろう。④11は会話の記述なので割愛する。

次は【19】、冬芽書房版の〈56〉なかば部分である。ここは、旧地役人の要求に危機をおぼえた吉田文助が京へ行くことを決意することが描かれている部分である。④15は、年貢軽減を要求したことは、徳川幕府の重い年貢に苦しめられて

いた百姓にとつては当然であつたことが記されている。今さらいわずもがなのことともいえるが、無駄な記述とまではいえないであろう。④16は、吉田が同僚の富田には知らせずに陣屋を抜け出したことが記されている。冬芽書房版では富田と相談の上でのことであつたと記されていた。吉田が京へ行く目的は、梅村に切迫した情勢を知らせすぐに帰国することを促すためであつたが、同時に危機迫る今の状況から逃れるためでもあつた。理論社版では、そのような吉田の狡猾さを強調しようとしたのであろう。④35は、主として吉田の立場について記されている。すなわち、吉田は副知事の立場にあり、留守を守ることにについては最大の責任を負わされていたことである。にもかかわらずひそかに逃げ出すという吉田の狡猾さをあらわすためにも、この部分は省く必要はなかったのではなからうか。付け加えていっておけば、この④35の部分には吉田が富田と相談したという記述も含まれている。

【21】、冬芽書房版〈57〉の前半部分は、真夜中に半鐘が鳴り出し火事騒ぎが起ころうと記されている。④17は、地役人が役所へ談判に行くことが描かれている。いよいよ事態が切迫する様を描こうとしたのであろう。④17は、早春の高山の様子が描かれているが、なぜことさらに省かれなければならないのかはよくわからない。④18は、先に触れた吉田が梅村のもとへ行ったことを知り、不安がる人々が描かれていた。然るべき追加といつてよいであろう。

【22】、【23】、【24】、【25】、冬芽書房版では〈57〉の後半、〈58〉、〈59〉の部分は多くの家が打ちこわしにあい、牢屋や学校までが襲われることが記されている部分である。それぞれに変更の箇所があるが、特に取りあげるべきものとは思われないので省略する。ただ、④38だけには若干触れておく。④38は、江馬弥平の作小屋が火事にあつたにもかかわらず傍観していた火方らの一人、増蔵について記された部分である。きかぬ気のあばれ者として名がとおつていたといつたことが記されている。増蔵に続いて、畳屋の佐吉、そして豆腐屋の安右衛門についてもそれぞれ記されており、特に増蔵の部分だけを省略する必要はなかったのではなからうか。ただ、佐吉と安右衛門については身なり恰好や様子の記述であり、ネガティブなものではなかった。増蔵だけをことさらにネガティブに記すことは

ないと判断したと考えられなくもない。

【26】、冬芽書房版〈60〉の前半部分は、役所の門番であった辰造が引きまわしの果てに殺害されることが描かれている。④24は、辰造が清吉に声をかけられ逃げ出す様子が描かれている。清吉が「おい、辰造！」と声をかけるが辰造は聞こえぬふりをして足を速めた。清吉が再び声をかけると、辰造は立ちどまり「何用か？」となる。清吉はそれにこたえるかわりに、大声をあげて仲間を呼んだ。すると辰造は突然逃げ出すのである。冬芽書房版では「呼びとめた。」とだけあり、そのあとには「辰蔵は猛然と食ってかゝった。」とあった。ちなみに、冬芽書房版では「辰造」は「辰蔵」になっていた。やがて辰造は刀を抜いて清吉の肩に切りつける。それを見て人々が大騒ぎとなることが記されているのが、④25である。そこには、清吉の女房も泣きながら駆けつけ、みんなで清吉を家に運んだといったことも記されていた。その間に辰造は首尾よく姿をくらますのである。冬芽書房版では、「相手が倒れるのをみて、彼は一さんに逃げ出した。」とあるだけであつた。いずれも、然るべき追加であつたといえるであろう。逃げた辰造は隠れ場所を求めてやがて堀を越えて役所のなかに侵入する。④26は、役所の内庭におりるも適当な場所を見つけれない辰造が描かれていた。はじめは米倉のなかに隠れるつもりだったのだが、そこには錠前がおりていたのである。やむなく辰造は米倉の屋根によじ登り、そこでじっとしていることになるのだが、冬芽書房版では役所に侵入するやすぐに屋根に登ることになっていた。これまた、然るべき追加といつてよいであろう。やむなく屋根に登った辰造はしかし、すぐに発見され捕えられてしまう。そのことを聞いた火方らはすぐに役所に押しかける。④27は、役所の門前に居並ぶ役人たちの様子が描かれていた。火方らは彼らに向かい辰造の身柄を引き渡すように要求するが、むろん役人たちは簡単に求めに応じようとはしない。そこで火方らは力づくで役所内に入り込むが、それが描かれているのが④28である。この間のことを冬芽書房版では、「火方と百姓はそれをきくと、すぐに役所へ押しかけて、辰蔵の身柄のひき渡しを要求した。そして地役人らがためらっている間に、彼らは白州に闖入して、辰蔵を門のそとまで引きずり出した。」と記されているだけであつた。いずれも然るべき追加といつてよいであろう。

結局、辰造は火方らにつかまり役所から連れ出されることになるのだが、驚くことに役所を出たとたんに辰造は人々に襲われ負傷する。負傷した辰造はそのまま制札場に連れていかれ晒されたあげくに、最後は引きまわしにされ死んでしまう。④29は、制札場において辰造を様々になぶる人々が描かれていた。これまた、然るべき追加といつてよいであろう。

【28】、冬芽書房版〈60〉の後半は、おつるを逃がそうとした吉田忠太郎がつかまり、牢屋に入れられることが記された部分である。④30は、吉田がおつるを伴ない逃げる様子が描かれていた。この部分は一頁半に及ぶ少々長めの記述であるが、次の【29】は理論社版で新たに加えられた単位であつた。吉田とはぐれたおつるが一人逃げる様子が描かれている。おつるに関する記述を大幅に書き加えたもので、④30もその一環であつたといえるであろう。④31は、吉田が縄をかけられ物置小屋につながれる記述である。吉田がつかまつたときの具体的な記述であり、然るべき追加といえるであろう。

【30】、冬芽書房版の〈61〉は、暴動が拡大するなか、難を逃れようとする人々が描かれている部分である。④32はそれぞれの村で騒動が起こったことが記されている。その直前には、村々がいつせいに蜂起したと記されており、そのことを補足的に記したものである。④34は船坂屋半右衛門の行動が記されている。これもまた、その直後に半右衛門の行動が記されており、それを補足する意味で加えたのであろう。④39は百姓たちの会話の記述であるが、これは④33との差しかえといつてよい。④33は百姓たちの意気あがる様が記されているが、④39はそれが百姓たちの具体的な会話で描かれていた。ことさらに変える必要があつたかどうかは疑問である。

【31】、冬芽書房版〈62〉と〈63〉の部分は、暴動のさらなる拡大を危惧した旧地役人が様々な対策を講じることと、一時鎮静化に向かったことが記されている。④40は、暴動が拡大することに対する地役人らの不安が描かれているが、これも④35との入れかえといつてよいであろう。④35はむろん不安も描かれているが、地役人たちの思惑あるいはたくらみといった点に重点をおいた書かれ方になっていた。④36は、地役人らをとった対策により、いくらか平穩になったことが記さ

れていた。然るべき追加であろう。④37は偶然をよそおい吉住礼助があらわれたことが記されていた。これ以後の部分は、郡中会所での百姓や火方たちの話し合いがかなり長々と描かれているのだが、冬芽書房版でははじめから吉住はその場にいた。地役人の吉住が何気なくその場にいないのは不自然で、何らかの説明が必要だと考えたのであろう。理論社版では、押上市次郎としめし合わせて偶然をよそおい来るという段取りをしていたことにしたのである。④41は火方の考えが記されているが、この部分をなぜことさらに省いたのかは不明である。他はすべて会話の記述なので割愛する。

次は【34】、冬芽書房版では⑥6の部分である。ここは、刑法官判事から取り調べを受けた梅村が、禁をおかして高山へ向かうことが記されている部分である。④42は、おつるの消息を気にする梅村が描かれていた。吉田忠太郎がおつるを伴ない逃げたが、途中つかまり牢に入れられたこと、そしておつるはその後一人で逃げたことなどが梅村の耳にも届き、梅村は心を乱すのである。この部分の内容は、先に触れた④30や④31として、あるいは新たに追加された単位【29】として大幅に書き加えられた部分である。内容としては移動ともいえるが、その記述量と詳細さは比べようもなく、先の部分の追加とともにこの部分を省略として処理した。他の箇所は特に取りあげるべきとは思われないので省略する。

【35】、冬芽書房版の⑥7は、梅村が高山へ向かう途中、役所の吉住と庄村宛に手紙を出し対処を指示したことが記されている部分である。④42は、下原までやって来た梅村がおつるの父親を呼び出し、おつるの消息をたずねたことが記されている。先にも述べたように、理論社版では④30や④31、そして【29】の追加によっておつるのその後はかなり詳しく描かれていた。しかし、梅村がそのことを知っていたわけではない。先に見た④42には、ある程度梅村の耳にも届いていたと記されていたが、理論社版ではそれが省かれていた。梅村はおつるの消息についてはほとんど何も知らなかったのである。④42の部分には、父親にたずねたところ、「二十九日の夜中に陣屋をぬけ出したのはほぼ確からしい」ことはわかったが、「その後の消息は杳として分らないとの事だった。」と記されていた。理論社版では、梅村がおつるの消息をほとんど知らなかったことにしようとしたこ

とはまちがいない。ある程度のことは梅村の耳にも届いていたと記されていた④42を省いたのもそのためであったといえるであろう。付け加えていっておけば、④42には、維新の志士のなかには赤いシャツを着てマルセイエーズを高唱して歩くものもあったことが記されている部分もあった。少々唐突な記述に見えるが、その前の部分には、下着に白いボタンのついた赤いシャツを着ている梅村が奇異の目で見られていたことが記されていた。それを奇異と感じたのは、そのような維新の志士を知らない田舎者であったからだ、という補足的な説明になっていたのである。

【36】、冬芽書房版の⑥8は、梅村の入国に警戒する人々が描かれている部分である。④43、④44、④45はいずれも火方たちについて記されている部分である。治安の実権を握っていたのは火方たちであり、やがて彼らは陣屋の護衛も担うことになり、人々も大きな敬意を払っていたことなどが記されていた。然るべき追加といつてよいであろう。

【37】、冬芽書房版の⑥9は、富田稻太が遺書を残して切腹を試みるが命は取りとめたことが記されている部分である。人々は富田の切腹を茶番と見なし冷笑した。しかし、ある人々は同情し礼賛したと記されているのが④46である。そこには、梅村の側近のなかで富田だけが入牢をまぬがれ、のちに『斐太後風土記』の著述に専念したことなども記されていた。富田のその後に関する記述は然るべき追加といつてよく、ある人々は同情し礼賛したことを加えたのは、いわばその根拠を示そうとしたからであろう。切腹を茶番と見なし冷笑する人々ばかりであったなら、のちの富田をうまく説明できないからである。もっとも、それで十分な説明になっていたとはいえない。

【38】、冬芽書房版⑦0の前半部分は、梅村がやって来ると聞き警戒する人々が描かれている部分である。④47は様々な対策を練る人々が描かれているが、内容的にいつてこれは④45との差しかえといつて差しつかえない。ただし、記述量は大幅に増えている。次の【39】における④49と④46も同様である。冬芽書房版では⑦0の後半にあたるこの部分には、梅村がやって来ると聞き動揺する人々が描かれていた。



【44】、冬芽書房版では〈71〉の後半部分である。梅村入国の知らせを聞いた人々は再び決起する。人々は一の宮に集結し、やがて先頭部隊が発する。⑤3は、梅村接近の知らせを聞き動揺する人々が描かれている。梅村との対決がよいよ迫ったことで人々はいっそうの動揺を示したことを記そうとしたのであろう。⑤4と⑤48は先と同様な差しかえといつてよい。町会所と郡中会所の策略が描かれているが、⑤4はそれをほぼ会話で構成したものである。他は特に取りあげるべきものとは思わないので省略する。

【45】、冬芽書房版〈72〉の後半は、梅村を迎えうつ人々の様々な動きが描かれている部分である。⑤5は戦意にもえる人々が描かれていた。然るべき追加といえるであろう。⑤6は途中で引き返す為吉が描かれているが、これまた先と同様⑤51との差しかえといえる。為吉は冬芽書房版では民助となっていた。⑤52はその民助のその後がごく簡単に記されているが、なぜことさらに省いたのかはよくわからない。⑤50は竹槍を作る人々が描かれている。構成の変更である△8に関する部分でも触れたが、梅村をうつために決起した百姓たちは皆が皆積極的であつたわけではなく、強制されてしぶしぶ出てきたものも少なくなかつた。そこで、百姓のなかには途中シシツキ槍の穂先を切り落とし、柄だけを持つて後続の竹槍組にまぎれ込むものもあつた。そのことが記されている部分に冬芽書房版では⑤50の記述があつたのである。すなわち、シシツキ槍の穂先を切り落とすものに加えて、竹藪に入り竹槍を作るものもいたことが記されていたのである。この⑤50は実は省かれていたのではなく、⑤60として【47】の部分へと移されていたものである。したがって、⑤60も新たに加えられたものではない。しかも単位間の移動であるから、本来は単位レヴェルの構成の変更として扱うべきものである。ただ、ごく短かい記述の部分なので、以前と同様ここでは追加と省略として処理した。見たように、冬芽書房版の構成に何ら問題があるわけではない。ことさらに変更する必要はなかつたといわざるを得ない。

【47】、冬芽書房版では〈72〉の前半と〈73〉の前半は、梅村討伐に向かつた先頭部隊が、宮峠を越えたものの武器と兵糧の不足に悩まされることが記されている部分である。宮峠をくだると久々野郷の部落である。⑤58は久々野郷の状況が

簡単に記されている。然るべき追加といえる。久々野郷の人々には炊き出しが要求される。⑤59は握り飯をむさぼり食う人々が描かれていた。これまた然るべき追加といつてよいであろう。⑤53は物資に窮乏する人々が描かれていたが、これは⑤61との入れかえといつてよい。⑤61は物資と応援を要求する人々が描かれていた。⑤60については先に述べた。

【48】、冬芽書房版〈73〉の後半は、梅村が火方たちに襲われ、逃れる途中に肩を撃たれ負傷することが記されている部分である。冒頭には、京都から呼び戻しの命令が記された書状が梅村のもとに届いたことが記されている。梅村は禁をおかして京都を出、高山に向かつたのである。⑤62は、梅村が呼び戻しの寛恕を願う書状を認めることが記されている。次には高山から情勢を知らせる書状が着く。それにもまた返書を書く。それは引用という形で記されているが、そのすぐあとに⑤63が加えられている。梅村の情勢判断が記されており、然るべき追加といつてよいであろう。他は特に取りあげるべきものとは思わないので省略する。

【49】、冬芽書房版〈74〉の前半は、梅村がかろうじて逃がれ、苗木藩に保護を求めたことが記されている部分である。【48】の終わりの部分には梅村が肩を撃たれ負傷する場面が描かれていた。だが、それは主として梅村側からの視点で描かれていた。それに対して⑤66は火方からの視点で描かれたもので、主として房吉らが梅村を撃つたときのことを百姓たちに語るといふ形で記されたものである。梅村らはかろうじて逃がれ、やがて苗木藩に保護を求める。⑤67は梅村がそのことを思いつくことが記されている。然るべき追加といえるであろう。苗木藩目指して歩き出した梅村であつたが、途中の村々ではどこも固く戸を閉ざしていた。⑤68は、梅村の悪評が他にも広く及んでいたことが記されている。どの村でも固く戸を閉ざしていた理由として加えたのであろう。

【50】、冬芽書房版〈74〉の後半は、人々が苗木藩に梅村の引き渡しを要求するが、拒絶されたことが記されている部分である。⑤69は大方の人々は引き返したことが記されている。梅村を追い返せば役目は終わったと考えたためであり、また兵糧がつきていたからでもあるとそこには記されていた。残った人々は苗木藩の城門に押しかける。⑤70は嚴重に固められた城門の様子が記されていた。然るべ

き追加といえるであろう。他はすべて会話の記述なので割愛する。

【51】、冬芽書房版の〈76〉と〈77〉は、火方らの行動が次第に激化し、名張村五郎左衛門が虐殺されることが記されている部分である。④75は、指導的立場に立つことになった火方たちについて記されている。それとちょうど対比的な形で加えられたのが④76である。火方が指導的立場に立つことで、役所と地役人は微妙な立場に立たされることになったことが記されている。然るべき追加といつてよいであろう。他は特に取りあげるべきものとは思われないので省略する。

【54】、冬芽書房版の〈80〉は、地役人が宮原に辞職を申し出るが受理されなかったことが記されている部分である。冬芽書房版では、宮原はまだ正式に知事に任命されていなかったことが記されていた。□54の部分である。次の【55】の部分に、宮原が正式に知事に任命されたことが記されていたことを考えれば省いても差しつかえないといえるが、ことさらに省く必要もまたないといふべきであろう。

【55】、冬芽書房版の〈81〉と〈82〉は、郡中会所が宮原に十二ヶ条の願書を提出したことが記されている部分である。④80は、次第にその立場が回復しつつあった郡中会所の状況について記されている。その郡中会所が宮原に願書を提出する。十二ヶ条にわたるその願書は引用という形で記されているが、④81はその願書についてのいわば評とでもいふべき記述である。そのような記述はむろん他にもあったが、それを補足したものである。④82は、願書に対処するにあたっての宮原の認識と判断が記されている。そのすぐあとに宮原の返事が記されているのだが、④83はその返事に対する評というべき記述である。いずれも然るべき追加といつてよいであろう。□55は、宮原の返事を聞いた郡中会所の総代らがおとなしく引き下がる様が描かれていた。宮原の態度は梅村とは異なり、頭ごなしに拒否することなくおだやかなものだったからであり、ことさらに省く必要はなかったといふべきであろう。宮原は郡中会所の立場にも理解を示し、また旧地役人もそのまま召しかかえる方針を取った。要するに以前の状態に戻ったわけだが、一方百姓たちは梅村を排除したのは自分たちの力であるとはばかりに鼻息が荒かった。その結果、地役人や郡中会所と百姓たちの対立が生じてきたことが記されているのが④84である。□56は、春になり百姓たちが畑仕事を始めたことが描かれて

いた。ことさらに省く必要はないと言わざるを得ない。

【57】、冬芽書房版の〈84〉と〈85〉は、宮原大輔が高山県知事に就任し、地役人たちと酒宴を催すことが記されている部分である。④85は役所の庭の様子が記されている。他にもかなり詳しく記されているのだが、無駄な補足とまではいえないであろう。④86は、地役人たちがそのまま採用されたことで、新知事と新判事を除けば郡代時代と変わらぬ顔ぶれであったことが記されている。然るべき追加といつてよいであろう。④89は、庄村が宮原の杯を所望したことが記されている。宮原の機嫌をとる地役人の一挿話としての追加である。□60は役所の庭の様子が記されているが、これは先の④85との入れかえというべきではなく、また④85への移動といったことでもない。宴会が進むうちに外は冷たい風が吹きはじめ、やがて大粒の雨が降り始める。□60はその雨が降ったあとの庭の様子であり、④85とは異なるものであることはいままでもない。ことさらに省く必要はなかったといふべきであろう。他はすべて会話の記述なので割愛する。省略部分も少なくないが、□57は④91との、□58は④93との入れかえといつて差しつかえない。

【58】、冬芽書房版の〈86〉は、梅村が牢で煩悶の末に亡くなったことが記されている部分である。④94は梅村の考え、④95は梅村が前任者の竹沢のことを思い出すこと、④96は梅村の懊悩が記されている。いずれも牢のなかでの梅村の煩悶の様子が加えられたものである。④97は梅村毒殺をめぐる風説があったことが記されている。病死ということになっていたが、実は政府の手による毒殺だったという風説が広がっていたというものである。毒殺の風説については冬芽書房版でも記されていなかったわけではない。次の【59】にあたる〈87〉の冒頭にそれは記されていた。その部分の一部の記述が断片的に④97の部分に見られるが、④97で新たに記されたことがらも少なくない。したがって、差しかえと見てもよいであろう。ところで、この【58】の冒頭には鉄砲弾を抜く手術のときの梅村が描かれていた。梅村は手術の際に基盤を所望し、相手と碁をたたかわせながらときには談笑さえして長い苦痛な手術にたえたという記述である。この記述は【58】に相当する〈86〉の部分にはなかった。しかし、かなり前の部分にそれはあった。



〈75〉としたごく短かい単位がそれである。冬芽書房版から理論社版への改稿を検討した最初の稿において、実は〈75〉は省かれた単位として指摘しておいたが、それは誤りであった。冬芽書房版〈75〉は、理論社版【58】の冒頭に移されていたのである。したがって、以前に掲げた対照表も訂正しておく必要がある。以前には、〈75〉に対応する理論社版は空欄になっていた。また、【58】は〈86〉に対応することを示してあった。だが、実際は〈74〉と〈76〉にはさまった〈75〉は【58】の部分に移動し、【58】は〈75〉と〈86〉に対応するのが正しいことになる。その部分の対照表を正せば次のようになる。

【58】	【49】		
	【50】	【51】	
〈86〉	〈75〉	〈77〉	〈76〉
		〈74〉	

以前には、〈75〉が省かれた理由として、「明らかに関羽になぞらえたこの記述はいかにも芝居がかっており、ふさわしくないと考えたのであろう。」と述べたが、もちろん、それも削除しなければならぬ。ただ、「いかにも芝居がかっていることは確かであろう。ちなみにいえば、理論社版では「三国志」の関羽のように」といったことばが加えられていた。また、「苗木の藩主がねんごろに迎え入れ傷の手当てをしたこともいっしょに省く必要はなかったといえるであろう。」とも述べたが、これまた無用の言として削除する。いうまでもなく、この部分も省くことなく移動させられていたからである。

次は【60】、冬芽書房版〈87〉の後半部分である。ここは、梅村派の人々、特

に江馬弥平のその後が記されている部分である。④99は柏木徳兵衛のその後が記されている。梅村派の一人として加えられたものである。④100は江馬弥平のその後が記されている。弥平については他にもかなり詳しく記されているのだが、ここでさらに加えられたのである。しかも、八頁にも及ぶ長い記述である。作者江馬修の父親だからというほかはないが、他の人々に比べて著しくバランスを失っていることはまちがいない。

【62】、冬芽書房版の〈88〉と〈89〉の前半は、川上屋善右衛門その他京都で活動していた人々のその後と、広瀬村五郎作が逮捕されたことが記されている部分である。④101は奥田金馬太郎が京都から帰って来たことが記されている。奥田は刑法官による取り調べに立ちあうために京都へ派遣されていたのである。その彼が帰ると間もなく首謀者の召し取りがはじまるのである。然るべき追加といつてよいであろう。④62は逮捕されたのは貧農ばかりであったことが記されている。この部分は単に省かれたわけではなく、次の【63】に④103としてやや詳しく書きなおされる形で加えられている。④102は五郎作の逮捕について記されている。この部分は十二頁にも及び、先の江馬弥平に関する記述を越える第四部においては最も長い追加である。これまで、五郎作は百姓のなかではかなりスポットをあてて描かれていた人物ではあったが、弥平の場合と同様やはり著しくバランスを失っているといわざるを得ない。

最後の【63】、冬芽書房版〈89〉の後半は、逮捕された五郎作がとうまる駕籠に乗せられ高山を去っていくことが描かれている部分である。④103については先に述べた。④104は、五郎作の娘婿である清兵衛がかつてのことを思い出し涙を流すことが描かれている。かつて清兵衛は、五郎作の娘おみかのもとに夜ばいに行くが、不覚にも父親の五郎作に見つかってしまう。だが、その夜は年貢半減の話しを聞いて来た五郎作が有頂天になっており、あろうことかいっしょに酒をくみかわしながら話しに花を咲かせたのであった。そのことは第一部においてかなり詳細に描かれていた。清兵衛はそのことを思い出し、義父の姿を見て涙したのである。然るべき追加というべきであろう。

おわりに

江馬修『山の民』は大きく三度の改稿を行っていた。その第一は初稿（雑誌『ひだびと』掲載）から学会版（飛騨考古土俗学会発行）へ、その第二は学会版から冬芽書房版へ、そして第三は冬芽書房版から理論社版への改稿である。したがって、都合四つのテキストが存在する。ただし、初稿は第三部が存在しないので第三部に限っては三つのテキストしか存在しない。理論社版のみ第四部があるが、それは学会版や冬芽書房版の第三部を二つに分けた結果にすぎず、新たに加えられたものではない。

『山の民』という作品を論じることが、これら四つのテキストを論じることにはかならず、そのためには三度の改稿過程を明らかにしておくことが求められることはいままでもない。本稿で行なったのは、『山の民』を論ずるためのいわば前提作業である。序説としたゆえんである。